

ルチル・シャルマ著「ブレイクアウト・ネーションズ―「これから来る国」はどこか?―」ハヤカワ・ノンフィクション文庫、早川書房 2015年4月25日刊を読む(II)

## 新たな時代に必要な<sup>マントラ</sup>真言

1. 急成長の条件をつくり出すことは、科学というよりも、<sup>アート</sup>芸術である。ある国が重要な改革をうまく成し遂げた時、あるいは、外国人投資家はその国について興奮している時には、この作業はいかにも簡単に見える。だが、急成長の条件など、すぐに崩れても不思議ではない。最も成長した国々の中には、中国、韓国、台湾など、自由市場向けの処方箋には普通は書かれていないような、従来にはないやり方で成功した国が含まれている。すなわち、育成したい産業に補助金を出し、減税を認め、特別区域だけで自由貿易を促進し、投資の保証を提供するといった方法である。(負債残高を抑えたり、インフレを安定させたりといった)基本を正しく行ったとしても、ビジネスが大きく伸びる保証はない。「何が効くのか?」に決まった処方箋がないので、「われわれは、『高成長は散発的で続くことはない』という基本シナリオを維持すべきだ」と、ハーバード大学のダニ・ロドリックは語る。
2. 私自身が本書で提示したいいくつかのルールは、ブレイクアウト・ネーションを脱線させてしまうかもしれないし、あるいは逆に遅れている国をブレイクアウト・ネーションに追いつかせるかもしれない。インドネシアの指導者が道を誤って、アルゼンチンのように一族の王国をつくろうと必死になりだしたら、この国は、今の経済モメンタムをすぐに失うだろう。中国があまりに早く人民元の上昇を容認すると、重要なコスト優位性の一つを失い、成長速度がさらに落ち込むかもしれない。プラス面では、もしインドで、鉱業や不動産といった政治的なコネに頼るセクターではなく、ITのような生産性の高い業界から、再び新たな億万長者が生まれるようになれば、腐敗と自信過剰という問題がこの国で克服されようとしている明らかな証拠になるだろう。タイの新首相が、バンコクと他の地域間の、とてつもないギャップを埋めることに成功したら、この国は、ブレイクアウト・ネーションに分類できるかもしれない。そして、ロシアにお金が還流するようになれば、それはこの国がもはや、民間企業をおびえさせて外国に逃がさなくなっていることを示すだろう。
3. 次第に明らかになっているのは、すべての新興国がブレイクアウト・ネーションになれるとは限らないということであり、ブレイクアウト・ネーションへの道のりも、国によって大きく異なるということである。すでに、ミクロレベルで格差が開いている兆候が見られる。2010年以降、新興国への資金の多くが、堅実な経営で高格付けを得ている消費財販売企業に向かうようになり、一方、国営企業や、収益の安定しない企業からは、資金が逃げる傾向が見えはじめている。このトレンドは今後も続き、「第三の降臨」を明確に決定づける特徴になることは間違いあるまい。投資家は、企業の選択だけでなく、国の選択においても、次第に「目利き」になっている。そして、新興国を一緒くたに見るのではなく、それぞれ別の背景を持った個別の市場としてとらえるようになるはず

だ。この 10 年間は、多くの国が「世界の環境がたまたまそうなった」という偶然にただ乗りして繁栄してきた。しかしこれからは、そんな追い風に乗れる国などないはずだ。どの国も、自らの足で前へ進まなければならない。ラテン語の次の真言<sup>マントラ</sup>を実行できる国こそが、新たな時代のブレイクアウト・ネーションとなるはずである。すなわち、「風がなければ、自ら漕ぎ出せ」。

P416 ~ 418

[コメント]

ポピュリズムに陥った与野党の政治家と、子孫の運命を予測できない有権者は日本の未来を危うくしている。「風がなければ、自ら漕ぎ出せ。」本書をよく読み、主権者の果たすべき役割を考えたい。

— 2015 年 11 月 21 日 林 明夫記 —